

天理  
冊子本 春 雨 物 語 〈翻 刻〉

《はじめに》

木 越 治

一、この翻刻は、天理図書館所蔵の『春雨物語残缺』（請求番号、九一三・六五——イ二七——一三）いわゆる天理冊子本を可能なかぎり原状のまま翻刻しようとするものである（天理図書館翻刻番号 第二八五号）。

二、本書については、『天理図書館稀書目録和漢書之部第三』（昭和35年10月刊）に次のように記載されている。

春雨物語残缺 写 一冊（一三）

二八〇八

自筆 序 袋綴 改裝後補丹表紙 用紙裏打 二七樞一九・五  
樞 五十七丁 題簽左肩藤井乙男筆書名同 内題なし  
識語（序文の條中村幸彦筆朱書） 旧藏羽倉家、後人出刊の意に  
てもありて／作せし序文歟

（松室本 「血かたびら」約十丁、「天津処女」約九丁、「海賊」  
四丁、「妖尼公」三丁半、同別稿一葉、「目ひとつの神」七丁半、  
「二世の縁」約二丁、「梶噌」五丁、「楠公雨夜かたり」約三丁  
半、同別稿二葉、「捨石丸」四丁、「宮木家」約五丁を存す）

三、翻刻にあたっては、次のような方針をとった。

- (1) 巻頭にある後人筆の序文、各作品の重複部分、整理に際して附された貼紙の記載等もすべてそのまま翻字するようつとめた。
- (2) 改行・丁移りの状況などもすべて原本のままとした。全体の丁数はそれぞれの丁の最終行の下に（1オ）（1ウ）などのようにして示した。ただし、整理用の貼紙の多くは半丁分の用紙に貼付されて綴じ込まれているので、これらは全体の丁数に加えず、（貼紙）として扱った。
- (3) 整理用貼紙の記載は《》を付して示し、貼紙のない箇所における（中欠）（後欠）の文字は私に補ったものである。なお、本書にはこれら整理用貼紙（朱書）の他、25オ・43オに作者自筆の貼紙二葉が貼付されており、また一ないし二、三字分を貼紙によって修正した箇所（くわしくは、翻刻注記を参照のこと）も存するので注意されたい。
- (4) 漢字については、新字体のあるものはこれに従い、迹・泪などの異体字の類は残すことを原則とした。
- (5) 原文には濁点がないので私意により附した。ただし、万葉仮名等（賀・具・五など）により濁音を示そうとしたと考えられるものについては、その旨注記した。

- (6) 句読点も原文にはないので、すべて私意により附した。
- (7) 明らかな誤字衍字及び意味の通じない箇所については（ママ）と傍書した。
- (8) 明らかな脱字については「」を附して補った。
- (9) ミセケチによる修正は二行割りにして、消された文字の左側に傍点を附した。また、(3)の項でふれたように、原文には貼紙によって修正を施した箇所もいくつかあるが、これらについては別に注記した。
- (10) 手ずれや汚れ、虫損等で判読不明の箇所は□とした。また、辛うじて判読しうるものの確実でない文字についても□内に入れて示した。
- (11) その他、必要な事柄、参考となる事柄等はすべて後に注記した。

なお、本書全体の翻刻は今回がはじめてであるが、部分的には、すでに何度か翻刻が試みられている。今回の翻刻にあたってはそれらをも参照させていただいたので、感謝の念をこめつつ、左にその文献名と翻刻箇所を列挙しておく。

- (1) 藤井乙男氏「妖狐蟹のはらわた」(「国語国文」昭和18年11月)「妖尼公」(腹稿を除く)と「宮木が塚」
- (2) 中村幸彦氏「春雨物語のこと」(「学海」昭和21年3月)「捨石丸」
- (3) 中村幸彦氏「春雨物語」(積善館、昭和22年4月刊)「宮木が塚」(天理卷子本と重ならない部分のみ)「楠公雨夜

かたり」(腹稿を除く)「捨石丸」

- (4) 奥沢一恵氏「天理冊子本春雨物語『海賊』翻刻」(成城大学近世ゼミナール会報「近世レポート」第2号、昭和59年3月)「海賊」

### 春雨物語残缺

(表紙)

《旧蔵 羽倉家の後人 出刊の意にてもありて作せし序文歟》

(一才貼紙)

1 梁山に真艸行の三体あり。艸を其始にして真行成らば地と埒し石木かくならざる時渾沌たる海原のごとし。茲におゐて立たる石一ツを置て是を号て天降石と名付也。これより種々の石を集は5 以て品々の状を造出す也。蓋草は艸として玄妙の象をなす。此艸則真なる事を知し庭を造る者は千歳不易一時流行の目出を得へしと師の物語を其まゝに是に序とするものならし。

(一ウ)

《流布富岡氏蔵本春雨物語と比較するに

以下「血かたびら」にあたり、初二丁を欠く》

(貼紙)

1 明にして君としてためしなく、和漢の典籍にわたらせたまひ、草隸はもろこし人も推いたゞきて乞も

てかへりし也。此時唐は憲宗の代にして徳のとなり  
 にかよひ米たり。新羅は哀莊王のいにしへをしのびて  
 5 八十艘の貢ぎたてまつるなり。天皇善柔の御さ  
 がにてましますば、はやく春の宮に御くらゐを  
 ゆづらまく内々定したまへば、大臣参議参  
 議さる事とめまく議りあひぬ。一夜夢見(た)  
 まへり。せん帝の御たからかに  
 けさの朝けしかのねきく鳴しかの<sup>其声</sup>きけを  
 1 きかずはゆかじ夜の明ぬとに 打傾きて  
 おぼしりたまへり。又御使あり。早良親(王)かし  
 原の御はかに罪を謝して、たゞおのが後なき  
 をうたへなげき申さく。是は御心のたわやぎ  
 5 にあだ夢とおぼししらせたまへども、法師かんやぎ  
 等に祭壇に昇りて御加持まいらせはらへ  
 したまへり。侍臣藤原の仲成、いもうとの菓子  
 等トす。夢に六つのけちめ有はよきあしきの数  
 さだまらんや。御心の直きに悲き神のつく也  
 と申て、出雲の広成におほせて御くすり調  
 1 ぜさせたいまつる。又参議大臣の臣たちはか  
 り合せて、こ、かしこの神社大てらに御つかひ有。  
 又伯耆の国に世を避たる玄賀めして御  
 加持まいらす。此法師を僧都になし外し  
 5 たまへど、一族道鏡が暴悪をけがしとて  
 山深くこ、かしこに行ひたりき。七日にして

## (2ウ)

妖魔今はやらひしとて御いとまたまはりぬ。  
 御心すがくしとて尚まゐれとみことのらせ  
 たまへど、思ふ所ありとて又伯伎の国へ  
 1 かへりぬ。仲成外臣をさけんとてくすり子にはか  
 り合せてさまくなくさめたいまつる。よからぬ事と  
 打ゑみて是等が心をとらせたまひぬ。よひくしの  
 御宴歌垣八重めぐらせて遊ばせたまふ。  
 5 その御 棹鹿はよるこそ来なけ  
 おくつゆを荷むすばねば朕わかゆ也  
 御かはらけとらせたまひり。菓子扇とりて立  
 舞ふ。三輪の殿の神の戸をおしひらかすもよ  
 いく久く と袖かへしてことほぎたいまつる。  
 いよ、すがしくて朝まつり事怠らせたまはず。  
 1 太弟才学に長じたまたふをみそかにいみて  
 人しらし奏す。みかど独言したまへり。皇  
 祖酋矛をとりて道ひらきたまへりき。十嗣  
 と申崇神の御時までしるすに事なく、さか  
 5 しき教へにあしく撓むかと見れば、又枉て  
 言を巧にし、代々さかゆくまゝに静ならず。朕は  
 文よむ事疎かれど、只直きをのみつとめんと  
 おほす。一日、大虚に雲なくて風條を鳴  
 さぬに、あやし、空に車のとゞろく音す。空  
 海まゐりあひて念珠おしすり、呪文高らかに  
 1 となふれば即地におちて倒たり。あやし、

## (3オ)

## (3ウ)

## (4オ)

蜚人の空を駈る也。骸にをさめて忌部の  
浜成行ひて、おちし所の土三尺をほりて  
神やらひにをらび声高らかに堂有。一日、太弟  
5 柏原のみはかに参りて密旨の奏文有。

何の故とも誰つたふべきに非ず。天皇も一日  
御はか詣たまへり。百官百司みさき追ひあとべに  
そなふ。左右の大臣大將中將御車のをち  
ここに弓矢取しはり、御はかせきらびやかに帶たま  
へり。百取の机しるに幣帛うづまきにつみ

(4ウ)

1 はえ、さか木の枝に色こき交て取かけたる  
神代の事もしのばる、也けり。うたづかさの左右の  
人々音なみて三くさの笛の音つゞみのおと  
に心なきたまへりき。心なきよぼろさへ耳かたぶ  
5 けり。あやし、うしろの山よりくろき雲霧立  
のほりて雨ふらねど年の夜のくらきにひとし。

いそき風箏にて我もくくとよぼろのみ  
ならず取つぎて左右の大中將つらを乱

してそなへたり。還御たからかに申せば  
大伴の氏人開門す。御つねにあらずとて

(5オ)

1 くす師等いそぎまゐりて御くすりたいまつる。  
兼ておぼしめす御国ゆづりのさがにやと  
さらに御なやみなし。栗栖のの流の小鮎に  
藤の岡のわらびとりくはへて鮎や

5 何やす、めたいまつる。みけしきよくてぞ。夜

の月出、杜鵑一二声鳴てわたれば

大とのごもらせたまひぬ。空海あしたまゐる。

聞せたまふに、三皇五帝は否也。其後の

物がたりせよ。いづれの国かをしへに開

1 ざるべき。三隅の綱の一隅我にきたれと云

が私の始也。たゞ御心の直きま、におほ

し、らせたまへ。日出て興、日入て臥す。飢

てはくらひ、渴しては飲む。民の心也と申。打

5 うなづかせたまひて、よしとのらせたまへ

り。太弟まゐりたまへり。周は八百年

漢家は四百年、いかにすれば長しと

ぞ。こたへ申さく、周は七十年にして衰へ

漢は高祖の骨肉いまだ乾かずして

(6オ)

1 呂氏の乱おこる。つゝしみの怠りにもあらず

とこたへたまへり。さらば天の時とは日々に

照します皇祖神の御国也。儒士等天とは

即天を指し、又命禄といふ。又数の

5 限にもいふ。是は多端也。仏氏は天帝も

我につかふと云よ。あな煩しとうそ吹たまへば

御こたへなくてまかん出たまへり。あした御

国ゆづりの宣旨くだりて、故さと、成し

平城におり居させたまへり。元明より昔は

宮殿の有しさにて、一あしあがりの宮の

1 ためしに、茅茨剪らず甘棠うたす。せん

(6ウ)

だいのおぼしめしに、いにしへをしのびて長丘  
にうつらせたまへりしかど、七代の宮のきらびやかに  
ありしを、咲花のほふが如く今きかり也と

5 よみしを又思し出たまひてそこにと定

させたまへり。宇治にいたりてしばしとめさせて  
御制よませたまへり もの夫よ此

橋いたのたひらけくかよひてつかへ万代

までに 是をうた人等七たびかへしてうた（ひ）

1 上る。網代の波はた、ねどけふこゝに千代

と鳴鳥は河洲に群るをとて又御

かはらけめす。葍子れいにさ、げ物まるる。歌

よめとのらせたまへり 朝日山にほへる空

5 はきのふにて衣手さむし宇治の川波

河風はすゞしきをと打咲せたまへり。左中

将惟成よむ 君がけふあき川わたる

よど瀬なく吾はつかへん世をうちならで

兵部太輔橘の三陰もよんだい

妹に、る花といへばとくきても見てまし

1 ましものを岸の山振 それは橘の小嶋がさき

ならずや。飛鳥の故さとに草香部の

太子の宮ならずやとぞ。尚多かりしかどもらしつ。

奈良坂にて御夕げまるる。この手がし葉はいづ

5 れと、はせたまへば、それは倭たる人等にて忌言

なり。今つかふまつる臣たちいかで二面ならんよと

(7才)

のたまひて、古宮にはそ（の）夜に入せ給ふ。あした、

御簾か、げさせて見はるかせたまへば、□は春日・

高円・三和山、みんなみは高むち山をか

10 ぎりて、西は葛木・たかんまの山・猪こま・二神の

峰、青塙なせり。うべも開初より宮居

1 こゝと定たまひしを、せんだいのいかさまにおぼし

めして北に遷らせたまひしと独ごたせたまへり。

北は元明・元正・聖武のみはかの立並びさ

せたまへりと杵にふし拌みしたまへり。

5 大寺の薨たかく層塔の数々を

かぞへたまふ。城市の家居ども、又今の

都にかへりはてねば、故さと、もあらぬたたずま

仰ぎ見たまひて、先出させたまひ、先出

たまひ、仰ぎ見たまひて、思ふに過し御か

10 たち也。にしの国に生れて此みちのく

(8ウ)

《以下数丁欠なれど 次の丁三行目のはじめ

より この間の欠文をおぎなひ得》

(貼紙)

1 はまんとて、先出させたまひき。思ふに過し

御かたち也。西の国に生れてこのみち

のく山のこがね花に光そへさせ給ふ也。

いぶかし、とおほせたまへば、参りあひたる法師

5 が云□是は華嚴経と申にしるせし也。

かたち 如来のへん化、天に在せては虚

空にせはだかり、又ひそみては芥子の中に  
所得たまへりとぞ。大ぞらをまことの御姿とは  
申せど、まことの肖像と申は御あなうらに  
10元の年号有三たびの御うつしにて、五尺

(9才)

(9ウ白紙)

(中欠)

1 額がたてまつりものも道についでとの有がた  
き昔がたり也と申。兄のみ子にこえて我在  
んやと刃に伏したまへば、止むことなくて御位  
にのぼらせたまひき。御代あに並びなきひじりの  
5 みこと仰ぎたいまつりし。普柔は損多しと  
申されしぞ乱世の人の心也。かしこの尊海  
は禪位をいつはりしいたづら言也。奈良の人  
も臣達は今一たびたひらの宮に御くらゐ  
かん<sup>かん</sup>させんとねぎたいまつる。北のみかどに  
10 心を通はす人も有けん。よからぬ事ぞと  
のらすにぞ。仲成是につきて、君のおり  
1 ゐはしばしの御なやみ也と申す。ふた、び  
御代にあらせんとしこづ。我兵衛の賢  
也。奈良山に軍だちしてみいつたためさんと。  
又市町のわらはがうたふをきけば、花は

(10才)

5 南に先さくものを、雪の北窓心寒しも  
とうたふを北に聞えて、平城の近臣を召て  
問たまへば、是はくすり子・仲成がすゝめたい  
まつる也。此春の正月のついたちになれるの  
御くすりしたいまつるに、居蘇白さんはすゝ  
めて度崎さんを奉らず。いかにと聞せ  
1 たまへば、君は山河をこえていかで在せたまは  
ぬを、悲しくとて、泪を袖につゝみもらし  
たり。此時御前にありて聞しより外は正しき  
事は知侍らずと申。さらばとて官兵をつか  
5 はして即とらへて奈良坂に梟られたり。  
葯子は家にこめをらせていましめさせた  
まへり。又御子の高丘親王をば上皇の御  
心をとりにて儲の君と定たまひしかど停  
させたまひて、僧になれとてかしらそがせて  
真如と申奉るは、御才世にこえさせしかば  
1 三輪を道詮に授かりたまひ、真言の密  
旨を空海につたへて、猶奥あらばやと  
て、貞観三年に帰朝有し也。此み子の  
御代しらせたまはゞとみそかには申  
5 取りとぞ。くすり子おのが罪をくやま  
ずして怨気はむらとなりて、ついに  
刃にふして死たり。此血の帳かたびらに  
飛走りてぬれゝとかはかず。若き者は

(11才)

(10ウ)

弓に射れどなびかず。劔にうてば  
 10 刃 缺ぬ。たゞ／＼おそろしき事となん  
 かたりつたへ申す。上皇はかたくしろしめさ  
 1 りし事なれど、たゞ／＼黙してゐたまへり。  
 御齡五十二まで世にはおはし  
 ませりき。

(11ウ)

## 天津処女

5 嵯峨のみかどの英才君としてためし  
 なければ、御代<sup>おし</sup>しらせたまひて万  
 機をこゝろみさせたまふに、もろこし  
 のかしこきふみどもを取えらびて行  
 なひたまへり。たゞ国つちと、もに平  
 1 らかになん。王臣はもとより皇女の  
 御うたにも、木に非ずくさにもあらぬ竹  
 のよの 又、毛をふき疵をと御口つき  
 こは／＼しく男さびたまへば、国ぶりの  
 5 歌よむ人々はたゞ口とぢてぞありける。  
 上皇わづかに四とせにておりぬさせ  
 たまひしを下なげきしてとりかへさま  
 ほしく思ふ人もつゝしみてひたいをあつ  
 めてのみありしが、帝もおほしやらせて  
 御弟の相伴のみ子を皇太弟に  
 1 御くらゐゆづりまして、都ちかき嵯峨の<sup>つゝ</sup>の、

(12オ)

山ぎとに山里<sup>やま</sup>にうつらせたまへば、せん帝  
 の平城の結構<sup>つくり</sup>をとめていにしへの  
 跡しのび申して瑞<sup>みづ</sup>がきふし垣の宮に倣  
 5 させたまひしかど、長岡のあまりにせば  
 ければ、王臣等の家は奈良にとめて  
 通ひたまへば、是はあやまり也とて、今の  
 平安城にうつらせたまふ也。土を  
 均して百石木つたひたて、豊石真戸  
 くしいはま戸を伸ゝにねぎうけひてうつ  
 1 らせしかど、人の心は花にのみうつりていつ  
 しか王臣の家も殿堂にかたどりて  
 老たる物識は、賈誼が三代のいにし  
 へをしのびてすゝめたてまつりしかど賢  
 5 臣等諷め奉りて、よからぬ事とて淡  
 昔<sup>むかし</sup>その巻に見えたり。今を仰ぎ  
 卒るぞかし。上皇下居の宮にわかう  
 花やぎて、たゞ参るものにもろこしの  
 ふみよめ。草隸よく学べとて多くの商  
 10 船のたよりにつきて求めさせたまへる中

(13オ)

(13ウ)

(12ウ)

5 出て、たれ問はずかたりていつはりはすべきを、我  
いつはりて又人の譌となる。よしゑよし、世の中の  
事どもを

(13ウ裏面)

《以下二丁重複 前丁より三丁目二行目末につづく》(13才裏面)

貼紙)

1 射れど箭折れ、刃にうてば刃缺たりしとぞ。

又御子の高岳親王を春の宮に

立させしかど、僧になれとみことのりあれば、即

髪をそぎたまひて、鑑真をめして三

5 論を授かりたまひ、又空海に真言の呪

術を習ひえさせたまひしかど、尚興有へ

しとてもろこしにわたりたまひて、葱嶺

をこえて羅越国にいたりて、心ゆくまゝに

帰朝ありし也。此み子の天のしたしらせたまはゞ

と上下皆ひそかに申あへりとぞ。嗟乎く

1 神のまにくならぬ事も有けるものを

(14才)

天津乙女

嵯峨のみかどの英才君としてためしなけれ

ば、御代押しらせたまひて、万機をもろ

5 こしの賢きに習はせたまひしかば、王臣は

もとよりして皇女の御うたにも、木にも非ず

草にもあらぬ竹のよの、又、毛を吹庇をなど

口つきこはくしくて、国ぶりの歌よむ人は  
たゞ口とちてぞ有ける。上皇はつか四歳にて

(14ウ)

(中欠)

1 に王臣はもとより姫み子さへ、木にあらず草にも

あらぬ竹のよのはしに我身はなりぬべら也

又、毛をふき庇を求むなど、口つきこはくしく

男さびたまへば、国ぶりの歌よむ人はたゞ口閉て

5 ぞ有。上皇わづかに四歳にており居させし

かば、下なげさつしてとりかへさまく思ふ人もつゝしみ

てひたいをあつめて在しが、帝もおぼしやられて

御弟の相伴のみ子を皇太子に春の宮

にうつらせて、わづかにて下ゐさせたまへば

10 今一たびとりかへさまほしくこそ帝も思し

やらせて、太弟に国ゆづ(り)まして、かしこき叡

1 慮と人皆申あへりき。やがて下ゐさせてわかう

花やぎたまへり。もろこしのふみよみて多くの

商船のたよりに求めさせたまひて、空海を

めして、是みよ。王羲之がまことの筆也とて

5 示したまへば、これはかしこに在中に手習

し給也とて、紙のうら少そぎて見せ奉りし

かば、海が筆としるしたり。妬くこそおぼし

たらめ。五筆和上と云しは、筆のあとさま

(15才)



くゝに書せたまひし也。又儒道はさかりながら仏  
10 教のさかえ甚しくて

(15ウ)

《次の丁二行目末 重複前三丁をとんで三丁  
めにつづく》

(貼紙)

1 たまひ草隷よく学び得させて多くの

海船のたよりに求めさせし中に、空海召て

は見よ。まことの王義之が筆也と示させたま

へば、是はかしこに在中に手習ひし跡也。

5 見たまへとて、紙のうらを少しそぎて見せ

たてまつれば、ねたくやおぼし成にけん。空海が

手よく書分ちて五筆和上といひし也。

皇太弟受禪したまひて、後に淳和

天わうと申奉りし。元を天長と改めさせ

たまへり。奈良の上皇は此秋七月に

1 雲がくれさせたまへりき。平城天皇と尊

号贈たまへりき。さて上皇の識度

に改りて法令事しげく、儒教専ら

に取用ひさせたまへり。されど仏法は衰へ

5 ずして、君の上に御仏の立せたまへりと

て、堂塔年なみに建並び博文

有識僧等つかさ人に同じく、朝にはた、

ねど祭典をさへ時々に奏聞し

(16オ)

おのづから彼をしへに引導せられ

1 たまへり。いかなれば仏法の冥福をかう

むらせたまへば、如来の大智の網にこめ

られたまふよと人は惟しみけり。中納

言清丸の高雄山の神願寺は

5 妖僧道鏡に宇佐の神勅を撓

させしに、清丸あからさまに奏聞せしかば

いかりにたへず、一たびは因幡貝外介

に貶せしかど、納飽ずして庶人となし

あなうらをたちて、大隅の国へ適

せらる。忠誠の志よきに称徳崩

1 御の、ちに召かへされしかど、や、納言に

卒らる。本国にくだりて水害を除き

民をやすきに置く功勞有しかど、て

いとほしと申さぬ人もなかりし。神願寺

5 後に神護寺と改しも、冥福の薄

きをいかにせん。今上の正良親王を

太子に定あらせて、ためしなき上

皇御二方、から国にも聞ぬためし

也。天わう仁明と後に崇尊し奉り

紀元を承和とあらためさせたまへど

1 儒教相並びて行なはるといへども車

のかた輪の缺そこなはれて行んや。

さて時の人のうたへる歌 忠信入

(16ウ)

(17オ)

(17ウ)

死地答固 若矯神勅、則豈

5可有今日哉 足のうらのきたな

丸てふあだ波をかけても清き名に

流れけり さて政令は唐朝のさか

んにのみ御心かたぶきて、古き

ふみをよませたまふに、六位の藏人

1良峰の宗貞才学有者にて、帝

の御心に叶へりしかば召まつはせて

文よめ、歌はと御隣み深くて、いつと

なく朝政も聞きかせたまへど、宗貞さ

5かしく、政事は片はしばらくも御こたへ

申さず。たゞ御あそび敵と日々に

つかふまつりき。年毎の豊明の舞

姫の数をくはへさせたまへ。是は清

見原のよし野に世を避たまひし時

1天女あまくだりてなぐさめ奉りし。それは五人の乙女

なりし古きためし也と申。色好み給ふ御さが

にてましませば、今年の冬を始にて宣旨くだる。

大臣納言の人々御むすめの中を花を

5さかせてつくりみが、せたまひ御目うつら「せ」

給ばやとしかまへたまひしかど、詠めすてさせ

たまふは、伊勢・加茂のいつきの宮のためし

に老行までも深窓の内にこもらせたまふ也。

さて国ぶりの歌は宗貞・在五中将・ふん

(18才)

屋の康秀・大友の黒主・喜撰法師

1などいふ上手出、又女形にも伊勢の子小

町いにしへならず今ならず名を後に

つたへたりき。帝の五八の御賀に興

福寺の僧のよみて奉りしを見そ

5なはして、長歌は僧徒に残りしとて御

感有し也。今見ればよくもあらず。人丸・赤

人・億良・家持卿の手ふりにはおとりたり

な。或時空海を召れて問せたまへる。欽

明・推古の御代に経典しきくわたりて

10猶一切の御経には数たらぬとや。汝が真

言の呪はいかにと問せたまへば、こたへ申さく

《以下数丁欠》

(18ウ)

1の宮きこしめして、外戚の家也。国家の祭

にあづかるべからずとて、葛野川の辺の今

の桜の宮の祭祀は是也。かく男さびたま

へば、宗貞がよからぬをひそかに、くませ

5たまへりき。伴の健宗、橘の逸勢等さが

の上皇諒闇の御つ、しみの間に謀反

有てと阿保の親王のもらしたまへば

官兵即いたりて搦めとる。太后是

をはやなりが氏のけがれ也。定刑せよとぞ。

(19才)

(貼紙)

(19ウ)

10 太子はこの反逆のぬしに名付られて僧

となりて、恒寂と申たまへりき。嗟呼

1 受禪廃立はあしきためしなるをとて

もろこしの文学ぶ事をにくむ人多かり。

帝は嘉祥三年に崩御あらせて

御陵墓を紀伊の郡深草山につい

5 たて、みはうぶり奉りし也。よて深草の

みかど、申奉りし也。宗貞みはうぶりの夜

より行へしらず失ぬ。是は太後の御にくみ

を恐れて、殉死と云事今はとゞめさせし

かど、此人生て有まじきにと人は云敢し也。

衣だに着ずてみの笠に身をやつし

こ、かしこに行ひあるきて初瀬寺の局

《以下数丁欠にて次の四葉は「海賊<sup>三</sup>」の断片也》

# 1 海賊

前の土佐の守紀の朝臣貫之、延長某の

年十二月その日任はて、上りくるに国人

名残をしてみてこ、かしこの津々浦々に追く。

5 やうく漕出たれど猶海の神や我をとゞ

むと思ふほどに、日数へたり。又海賊おひ

くと云。是は任中にいかなるうらみをやと

(20才)

人々おそる。いつみの国までたひらかにといのる。

こ、に來て船中みなやすき思ひしたり。

黒牛の灘こえて、今日てけよし。あすは

1 河尻にと人々喜ぶ。あやし、ちいさき舟一つ

こぎよすると見るに、恐ろしげなる男の

舳にたちて、前の土佐の守やおはするとを

らび声たかし。何者ぞと咎れば、是はかい賊

5 にて候。御跡したひたれど舟のちいさ、故

おくれ候と申たり。守たいめたまはらんとて

申に、船やぐらに立て何事をか申すぞと

問ふ。いや、あやしみたまふな。恨報はんとな

らばいかさまにもすべき。君達えらびて奉

10 りし古今和歌集の所々にいぶかしき事

の有を問あきらめんとて也。先題号は

(20ウ)

(中欠)

1 こたへあらば承らんとてはるく追來たり<sup>酒</sup>。

よき物とりそへて出さる、をあくまでくらひて

舷をたゝいて、泊浪は我足す、ぐ盟也。

櫻は我かうぶりし麻苧の乱なりとて、うた

5 ひ終りておのが舟に飛うつり、やんらめでた

もうそろとうたひていつちしらずかへりし後

都にかへりきて友則・躬恒・忠岑にかたりて

(21才)

(21ウ)

よろこびたまへりき。其後に又たれが使とも  
しらぬ文一章投入たり。ひらきて見たれば  
菅相公論と題して曰 懿哉菅公、生而

(22才)

1 得人望死而耀神威者自古惟一人

耳。古云、君子者無幸而有不幸  
小人者有幸而有不幸、公也貶黜  
而不免其幸者也。三善公不用革

5 命而去干適所、又文屋惟時雖學

清公不容者固以御父是善公之門弟

子而咄不答者私也。又朝廷而擊

藤菅根之面結其冤、然自古起

翰林生而出太政官府、黃備公与

10 公惟二人已、吉備者当干妖僧立

(後欠、以下重複)

1 ことへあらば承らんとてはるぐ追來たりとて

酒よき物とりそへて出すをあくまでくらひて

舷をたゝひて、滄浪も我盟也、櫻は我

かぶりし麻芋の乱よとてうたひ終り

5 て又おのが舟に飛うつり、やらめでた、もう

そろとうたひていづちしらずかへりし。都にかへ

りつきて友則・躬つね・たゞ岑にかたり言

にしてよろこびたまへりき。其後に又誰の

(22ウ)

つかひともしらぬが文一章投入たり。開

きて見たれば菅相公論と題して

1 曰 懿哉菅公、生而得人望死而

耀神威、自古惟一人耳。古云、君子

者無幸而有不幸、小人者有<sup>(マツ)</sup>幸

而有不幸、公也貶黜而不免其

5 不幸者也。三善公不用革命之（諫）而去干

適所、又文屋惟時雖學、清公不容者

私也。又朝廷而擊藤菅根之面

結其恨者矣。自古立翰林生起而出

太政官府者黃備公与公惟二人已

吉備者立妖僧立朝廷持大器而

1 不傾。公也寵遇<sup>□</sup>退送外藩者也

然生而人望死而耀神威者自古

公一人已。よくろうじたりしは實に學士の

言也。又云、公が以一貫之の字をつらぬきと

5 よまずしてつらぬきとはいかに。之の字こゝにては

助音のみ。之の字ゆきとよむは之飛と

よむ所にあり。つとめよくと書たりし。是は

誰ならんといふに、ふんやの秋津罪ありて

庶人にくだりし也。其後行がたをしらず。

學術はあれども文章なしとかたる人

1 ありき。貫之甚感伏して學友に

かたりて益とりたるといひしとぞ。

(23才)

(23ウ)

(24才)

(24ウ)

《次三丁半「妖尼公」の断片は富岡家本には見えざれ

ど春雨物語の一篇と思はる。卷子本にも断片

あり。本書末にもその別稿半紙一葉を附したり》

(貼紙)

1 むかしに頼朝卿こそ忠誠なりしとおもふ。

皇朝のおとろへを悲しみて父の仇と、もに

面ある

たりしは

(25才自筆貼紙)

1 人はわたくしもて天をあやしむ。人わたくしなく□

天と同一也。よく思ひてたゞおのが命<sup>註</sup>

の厚薄冥福の稟得たるにあきらむべし

と或物しりの示しを聞たり。

#### 5 妖尼公

鎌くら右大將は忠誠の君也。平治の乱  
の世を悲しび、建暦の時を得たまひ

て天のしたをとり治めたまへり。総追捕

1 使に海内を治む。しかれども朝につかへて家

に私なし。悲しむべし、三代に後なき事を。北条

がわたくし遂に時を得て九代を相続

したり。天豈わたくしに組せんや。天の長

5 き事釈氏の何劫も一瞬也。天ついに

神孫をたすけて明<sup>つ</sup>たりといへども明<sup>つ</sup>たり

といへども神孫私す。そのわたくしに乘て足利十三

(25才)

代と云はかなたにvariこなたに代り、骨肉啗

あらそふて猛獸にひとし。天是をにくみて職

をうばひ後あらしめず。大將薨じたまひて

1 政子の尼公垂簾の政事に万民治め

らる、といへども疑心を抱きて世は又乱る、かと

待が如し。尼公閨房を守らずして国に私す。

二代は病に天折したまひて三代の榮花

5 右府を申て天はゆるさずといへども冥福

に任せらる。尼公姪を好みて兄弟親

子の分無し。鳥獸の春氣を得て相

争むに同じ。義時の奸智姉尼公を

奸して右府をにくみ遂に弑逆す。妖

尼是を罪せずして益愛す。猶慾

1 情きかりにして近臣をめす。蓮花六郎は愛

すれども白馬寺の僧は召す。老臣の中

に又えらびてめす。畠山の莊司勇壯にして

忠誠もつとも私なし。尼公此人の美を見

5 て目をくはすれども忠信の英士何事とも

心つかず。尼公よくはかりて或夜御使有。

天下の大事あり。ひそかに卿の指揮を聞ん

とあり。莊司も兼て北条の奸計をにく

む。つかひの跡につきて即まるれり。尼公老体の

夜陰をあつくかたじけなくすとて、天も口

1 有べし。障壁に耳ありといふ。あの亭に來た

(25ウ)

(26才)

(26ウ)

れとて雪中の聲をしづかにあゆませたまへり。局たち燭をとりて道をしるべす。亭は陰翳として銀色夜尚光あり。陸に

5 昇れば罍爐の炎気春天にひとし。

先とてかはらけをすゝめて教巡にいたる。

莊司好まずといへども勇士の腹なれば沈湎に及ばず。しかれども酔中の人。局たちとみに群かゝりて烏帽子をおとし袍

を脱さんとす。何事をするといかれども退

1 かず。ついに紐刀をもて帯をたちて皆逃

たり。尼公いつの間に帷をぬきてひとへに成てむずとくむ。是はくといふほどに

さすが陽気発る。尼公前陰をとりて

5 恣に情をつくせり。莊司ことばなくて陸をくだり、装束をとゝのへて天明を待す

してはせかへりたり。其後めせどいたるべきにあらねば又是をにくみてついに亡ぼし

たり。和田・千葉・三浦の老臣此奸計をき、

てかたぐ相はかりては義時を討ん

1 として又ついに亡さる。呂氏の奸則天の

姪高時にいたりて九代にほろびたり。天は

神孫を相守りて私に組せずといへども

神孫又天にわたくしして足利にせばめ

5 られたり。足かゞの十三代骨肉相かみて

（27才）

血のかはく間もなし。私は毒薬也といへども口に甜ければくらふて斃る、也。是もある博士の翁にかたりたるをこゝに挙ぐ。

（28才）

1 目ひとつの神

あづまの人は夷也。歌いかでよまんとぞ云。

相模の國小よろぎの浦人のやさしくおひ

立てよろづに志深く思ひいたりて都に

5 のはり哥はよまばや。道のことわりを究

めんには高き御あたりにまゐりてこそ

とて、花の陰の山がつと人はいふばかりなりと

もとて西を指す心しきり也。鶯は田

舎の谷の巢なれどもだみたる声は

鳴ぬと聞ぞとて、親に暇こひて出たゝん

1 と申す。此頃は文明・享録の乱にいきかひ

の道に閑して過書ありとも時にあた

りて通さず。盜賊野山に立て肉

をも切くらはんとすといふと、しいて諫めし

5 かどしいて従はず。母の親のいふ。みだれたる

世に深く思ひ入たる事ならば、たゞく神

ほとけをいのりて行けと別のかなしげにも

あらぬは乱たる世の人也。所ゝの関

もやすくゆるされてや、近江の国に入

（28ウ）

（27ウ）

たり。あすは都にと心す、みたちて宿

1 まどひ、こ、老曾の杜の木がくれにこよひは  
やどりてんとて森深く入たちてみれば

風に折たる大樹の朽たをれし有。ふみこ

えてさすがやすからぬ心に立煩ふ。落葉

5 小枝は道をうづみて浅川わたるかと路

ふかし。神のやしろあり。軒こぼれみはし

崩れてのぼるべくもあらず。草たかく苔

むしたる木のもとに、誰かやどりし跡あるを

猶かきはらひて枕はこ、にと定む。おひし

物おろして心落居たれどおそろしさは

1 まさりぬ。斎き木の茂きひまより星の光

きら／＼しく見ゆ。月はよひの間にてひや、か

也。されどあすのてけよしと独言して

物打しき眠りにつかんとす。あやし、こ、にく

5 人あり。背高く手に矛とりて道分る

は猿田ひこの神代思ひ出らる。跡につきて

金剛杖つき鳴したる山伏也。その跡に

つきて女房のしろき小袖に赤きはかまの

すそ糊こはげにはら／＼とふみはら、かし

1 てあゆむ。檜のつまでの扇かざしていととなつ

かしげなるが、つらを見れば狐也。あとより

わらはめのふつ、かにみゆる。これもきつね也。

皆御やしろの前に立たり。矛とりしかん

(29ウ)

5 人中臣のをらび声高らかに申す。

夜まだ深からねど物のこたふるやうにてすぎ

まし。神殿の戸あら、かに明はなちて

出るを見れば、かしら髪面におひか、りて

其乱たる中に目ひとつか、やき、口は耳まで

切たるに鼻は有やなしや。しろき打着

1 にび色にそみたる。是は藤色の無紋の袴

今てうじたると見えたり。鶯の羽の扇を

右手に持て少しぞみたるがおそろし。

かななぎ申す。修験はきのふ筑紫の彦

5 の山より出て、山陽山陰の道々をめぐりて

都に出しが、何がし殿の御つかひをうけたまは

りてこ、を過るに、一たび御目たまは

らばやとて、山づとの矢むらを油に炎

こらしたると、又出雲の松江の鱧二

1 尾あさらけきを鱈に奉らんとて、いとよか

なり。修験者申す。都の何がし殿のあづまの

軍の君に申合さる、事のよし承りて

御あつかひに参る也。事もしおこらば此

5 あたりまでさわがし奉るべし。神のりたまふ。

此国は無益の湖水にせはめられて山

の物海の物も共に乏しき也。たま物にい

そぎて酒あた、めよとおふす。わらは立て

御湯たいまつりし竈のこぼれたるに、木

(29ウ)

(30オ)

(30ウ)

(31オ)

の葉小枝松かきあつめてめら／＼とく  
ゆらすに物のくまなく見わたさるゝに、恐  
ろしさに笠打かつぎてねたるさましたれど、いかに  
なるべき命ぞと心も空にあがりて魂け  
てをり。酒とくあた、めよとおほせあり。  
狙と兎が大なる獲をさし荷ひて

(31ウ)

5 あゆみくるしげに來たる。とくといひしにと

かななぎが申せば、肩のよわくてとかしこみ  
て在り。わらわめ事ども執行ひ、大なる  
かはらけ七つかさねて御まへにさゝぐ。

しろき狐の酌とりてまゐる。わらはは正  
木づらたすきにかけて物あた、めま

1 めやかに上のよつをのぞきて五つめ参る。  
た、へさせてうまし／＼とてかさねて欣

て、修げんまろうど也。打かさねてま  
ゐれ。あの木の根を枕にしたる若き者

5 よびてあひさせよ。召すと、女房のよぶに  
活たる心もなくてはひ出たり。四つめの

かはらけとらせてのめとおほす。是を  
のまずは命とられんかとて、多くは好み侍

らずと、やをらのみほしたり。共むらなます  
いづれもこのむをあたへよ。汝は都に出て

1 物学ばんとや。世におくれたり。四五百年  
前にこそ師といふ人は有けれ。乱たる今は

(32ウ)

(32オ)

文よみ物しる事おこなはれず。高  
き人もおのが封食の地はかすめと  
5 られて貧しさのあまりには、何の道何の  
芸技は我家のにつたへたりとて、い  
にしへに跡なきいつはり事を設けて  
大名の君富豪の民をあつめて、其  
みや事の財帛をむさぼる世也。

(33オ)

1 是に欺かれて習ふ事ども愚也。すべて  
芸技はよき人の暇に玩ぶ事なり。

上手もわるものもけぢめは有のみ。親さ  
かしくて子は得ぬあり。まいて文かき歌

5 よむはおのが心に思ひ得たらん。人に教へ  
られば其師の心にてこそあれ。師に

つきて学ぶは道のたづき也。独学は  
孤陋にあらず。我さす榮の外に習ひ

なし。あづまの人は心たけく夷心して  
直きはおろかに、さかしげなるはほしき

1 まゝに倭けたり。好たるにもわるものはあれど  
ついには道の奥にいたるべし。酒のめ、夜

深きにとのたまへり。祠のうしろより法  
師出来たりて云。酒は戒破れやすく

5 てさめやすし。こよひの興にひとつの  
まんとて、神の左坐に足たかく結

びて居たり。つらは丸くひらたくて

(33ウ)



わらは顔したり。かはらけとりて三つ  
よつほしきまゝ也。女房たちて、から玉や  
からたまやとはうしとりてうたふ。声は  
1め、しけれども打からびたり。法師いふ。若

き男よ。修げんにつきて国へかへれ。足  
つからさずして、たゞ一時にいたらん。親  
あれば遠く遊ばずと聖人は教へたり。

5 おのれは今ひとつのまんとて杯をかた  
むけて、突も鯨もくさしとて大なる

幣より蕪根の干たるをとり出てしがむ  
つらつきかたち、絵に見しりたる法師也。

山伏、いざといとまたばらんとて杖とりて  
たつ。一目運こゝに在りとして扇とり

1 直して空にあふき上る。猿と兎は手打て  
わらふ。山伏待とりて腋にはさみ飛か

けり行。法師は、あの男よくとて晒ふく。  
袋とりて背におひ、ひくきあしだはきて

5 あゆむ。法師とかんなぎは人なり。妖  
に交れど魅せられず。かんの齢は

しら髪づきていまだ百歳にいたらず。夜  
明はなれて森陰の庵にかへる。女房

わらは、こゝにとまれ。和上の御やどり  
有ぞ。あるじして饗膳せよとていざ

1 なひ入て、何をがなとて日なみとり出て

(34才)

見す。墨くろくぐと数百年の事  
しるしたりと、たれか見し人の物がたり  
也とぞ。今もつたへていづちにか藏  
5 めたらん

幾世をおいその森の下座の  
ふりし昔の物がたりきく

二世の縁

山城の高槻の樹の葉も散はて、いとさむし。

1 古曾部といふ所に年ひさしく住人

あり。家の子あまた召つかひ年

ゆたか也。常に文よむ事を好み

て友も求めず。夜は窓のともし火

5 に心ゆくまで遊ぶ。母親自のいさめに

いざ寝よとの鐘の鳴也。父のをしへた

まひしに、子ひとつ過れば、文よみて眼

いたむる也。野気おとろふともろこし

人のいひし。庭のをしへとつとめよ。承り

ぬとて閑に入。よひのまも物のおとせず

1 して目はまだねむらず。文に心すさびして

詩つくり歌よむ。雨やみて窓の紙

あかし。物の音絶たるに、あやしくほそ

鉦うつ音聞ゆ。あの音はさきくにもいふ

5 かしとおもひながら思ひ捨たり。こよひ

(35ウ)

(36才)

は正にこそとて庭におりてくまぐま見巡れば、常には草もはらはぬ所に石一つ捨てたり。此石のしたにこそと聞定めてあした男等よび出て、こゝ堀て見よ

10といふ。三尺ばかりほりて、大いなる

(36ウ)

## 《次二丁重複》

なほ「二世の縁」の断片と思はる、一枚あり  
コノ一片ハ卷子本ニ移ス。昭和廿八年十月》

(貼紙)

1直して空にあふぎ上る。猿と兎は手を打てわらふ。山ふし待とりて腋にはさみ飛かけり行。法師はあの男よくとてわらふ。袋とり背におひ

5ひくきあしだはきて、からくとひぐかせ立て行。法師とかんなぎは人也。妖に交れど魅せられず。かんのよはひはしら髪つきていまだ百歳にいたらず。夜明はなれて森陰のいほりにかへる。女房わらは、こゝにとまれ。和上の御

1やどり有ぞとていぎなひ入。日なみを出して見す。墨くろくと数百年の事をしるしたりと、たれか見し人の物がたりしなり。今もつたへていづちにか藏めたらん

(37オ)

5 いく世をおいその森のした庵のふりしむかしの物がたりき

## 二世の縁

山しろの高つきの木の葉も散はて、はいとさむし。古曾部といふ郷に年久しく

(37ウ)

## 《以下「奥書」に相当す。初数行欠》

(貼紙)

1けふは午時よりこゝにあつまり来る。雨肅々とふりて跡なし事かたりてたのしがる。腕こきして口こはき男を憎しとて、己はつよき事いへど、お山にのぼりしるしおき

5てかへれ。帰らずは申さで止よと云。それ何事にもあらず。こよひしるしおきてかへらんとて酒（の）み物くひて腹みち、糞かさかづきて出行。友だちが中に老て心有は、無益の争ひして渠必神に引き捨られん

10と肩に蹴よせて思へど追とむべくもあらず。大蔵は足もすぐれてはやく、まだ日たかきにて御堂のあたりにいたりて見めぐるほどに、日はや、かたぶきて物すさまじく風吹たち檜原杉むらさやくと鳴とよむ。暮はて、人なきに、何事もなし。下山の僧おどろきて、夜に入た。一人はいかに。

(38オ)

5 あやしと咎めたり。大願の候ひてこよひはこゝに

こもり明す也。大権現の御慈悲かうむりて成就  
あらばやとこそ。もし御いかりに触て命失なはん  
には大悲の御ちかひはむなしかるべしとて、つら  
つきすぎましくたくまし。いかなる願心かし

10 らねどもたゞたのめよくとて山をくだらるゝ。

雨はれたれば、みの笠投やりて火切出し

1 たばこのむ。いとくらうなりて、さらば上の

山へとて、木のくれ闇の中を落葉ふみ

はらゝかしてのぼるゝ。十八丁といふ道中

我天狗ぞとひとり言して来たり。御社

5 の前に何をかするしにとて見めぐ

るに、ぬさたてまつる箱の大きいなる有。

是をとてかつぎ上るに、此箱忽手足

おひて、大蔵をかるらかに引さげ空

にかけのぼるにぞ、ゆるせゝと叫けべども

こたふべくもなし。飛かけり行ほどに波の

1 音の高く聞ゆるに、今は打はめつらんと思へ

どかひなし。夜はやうゝ明たりしかば、神は

箱を地に投ていづちしらずなりぬ。見わた

せばこゝも海辺にて神の御やしる有。松杉

5 かうぐしき中にたゝせたまへり。かななぎなら

め。白髪交りし頭に烏帽子かうむり浄

衣馴たる。手に今朝のへつ物み台さゝ、

(38ウ)

げてあゆみくるが、見とがめて、いづちよりぞこゝ  
に來たりし。見しらぬ人也と問ふ。伯伎の大山  
10 にのぼりて日暮て神につかまれて遠くこゝ、  
にまゐりぬといふ。さてこゝはいづこぞとたづぬれ

(39ウ)

## 《以下数丁欠》

1 者どもが大蔵がかへりしとて、老もわかきも、まして

友だちの無益のあらそひせしがあつまり来て

先物くへ、足洗へといふ。母と兄嫁とは立さわぎて

涙のみ也。父はたゞにくみて居たり。兄はかまどの

5 前にたばこのみゝ命生て親たちのよろこびを

わするな。今よりはいたづら遊びなせそとてうそ吹

ゐたり。大蔵もこりたる体にて、二おやの心をとて

兄にも詞をかけ、山男かたげて朝とく出ゆく。

友だちがいふ無益の腕こきやめよといふに、母がうれし

10 がりて、能く念じて心あらためよ。人なみならぬ力

量には柴刈木こりて牛の荷ほどはかつげば

銭多く得たるにぞ。酒のめ、物くへと喜ぶ事限

1 なし。今は御山にのぼりて命たまひし御るや

申さんといふ。けふはのどか也とて出したてやる。銭

たまへ。物もとめてそなへ奉らんとて母にさき

立て行。倉やの中の櫃の内にたゞ二百文た

5 まへといふ。ひとつの内をみれば二十貫文からげ

(40オ)

たるを、博奕のまけかへせ／＼と友だちがせめるに、此ぜにしばしかしたまへ。やがて山かせぎして納めおくべし。つかみ出すを、兄が力なるぞ。我物と思ふかとしてゆるさず。こたへもせずして

10 母をかた手にてひつの中へ打こみて、足はやにはしり出る。嫁が見つけて、其銭いづこへと、

1 じめたり。これも又片手にて柴つみたる上へ投上たり。父は午睡の夢さめて、おのれそのせに

いづくへかもて行とて後より抱とめたれど、老の力よければ引れて行。兄は杵に見付て

5 甥とりて追ゆく。谷わたる丸木橋の所にて友だち立むかひて、おのれは／＼とて前より組つき

たり。是を足にかけて谷水のたまり流る、所へ投入たり。父と兄とも一つかみにして同じく

打こめば、是を見る人、あれよく／＼といへど、にげ足はや10 ければ取逃しぬ。里長目代にうたへ出たり。

(41才)

さても／＼大罪人也。関破りし時刑して1 追はらふべかりしをと思まきしたり。かたちを

国々絵にかゝせて触よといふ。山里なれば絵かく者なしとて、年とかたちをくはしく

国々にいへば、承りぬとて去ぬ。大藏は5 草駝天はしりに逃のびてつくしへわたる。博

多の津へ行て博奕の中に交りて何のさいはひか銭多く勝たり。こゝへもしか／＼の大罪

(40ウ)

人とらへよと触ながさる。此あふれ者ども、大  
三なるべしとて目くはせしかば、こゝをのがれて  
10 銭はおもしとて黄金十ひらにかへて、長崎

(41ウ)

の津へ逃行て、やもめ住のわびしきもとに

1 身をよせたりき。ばくちに勝ほこり、財主ぞとて酒に酔ぐるひして打た、き、いとつらくおそ

ろしきに丸山の楊屋へぬひ事にやとほる、をた  
よりに、かくしてたべ、我男は鬼なりとて、わ

5 な、き／＼たのむ。酔さめてよべどもあらず。さ  
ては我をうとみて逃出しなるべし。いつもの

丸山へ行しならんと追ゆきて、我めをかへ  
せ／＼とあらくの、しりたる声すざましきに

あるじは家の内の者もこゝにやどりしまれ  
10 人も、いかに／＼と立さわぐ。さうじ皆けはな

(42才)

ちてこゝ、かしこと乱入、酒ふりの取ちらしたるを  
1 のみほこり、杵もの、鮎も何もくひちらして

氣力ます／＼さかんにて又躍りくるふ。もろ  
こし人の遊ぶ所へ来たり。屏障けやぶり

(42ウ)

《二世の縁と共にこの「楠公雨夜かたり」も逸  
篇なりと思はる。別稿二葉 本書末に附す》

(43才貼紙)

1 楠公雨夜がたり

楠公湊川の陣に夜雨蕭々ときびしきに、近臣

をめして、面しろき物がたり有。むかしく、猿が島といふははるかなる西国のはてにて、いとにぎはしき5所と聞ゆ。そこに

(43才自筆貼紙)

1 楠公雨夜がたり

楠公湊川の陣に夜の雨蕭々として、さぶしさに近臣をめされて、おもしろき物がたり有。こよひの興にかたりて聞すべしとて、茶かき

5 たてさせて、さてかたり給へるは、むかしく

猿の尻はあかうその事どもよくきけ。西の

国に賑はしき所といふ。長者の庭に柿の

大樹五もとあり。其垣ね流る、谷川に

穴ずみする蟹の翁あり。或時にさる丸

10 かきの木末にのぼりてよく照たる実を心ゆくまで取くらふを見て、翁立よりて乞て

1 いふ。うまきを一二つたうべよといふ。猿丸は

心あしくて、いであたへんと大なる石の垣ね

にあるをつるくとはひ下りて蟹が背に

磔うちして、ついに背さけて死たりしを、心

5 よげにおのれは家に入ぬ。胎生なれば、疵

口よりあまたの子どもはひ出で、もとの谷水に

かへりし。後にたゞひとつ大きなが此事を

聞しりて仇打せんとねらふ事久し。又垣の

へだてをこえて八十はかりのうばらあり。黍

(43才)

10 の粉の団子をつくりてうまげにくひたりしに

蟹のまなこきらしく、両脇をあげて

1 いふ。およな殿よ、何をうまげにめきると、へば、是はことし

の垣ねにつくりたるとう黍のだんす也。ほしくばあたへ

んと云。先ひとつたまはれといふは、やがて取てあたへて云。

汝が親蟹はいかにしたる。久しう見ぬぞと、ふ。されば

5 其事にて候。去年の秋の事なり。あの隣の猿丸

が、柿の子ひとつたうべよと乞しに、柿はあたへずして

石のつぷ手打して親はそこに死て候。にくしく敵

うたんと思へど、かれは多くの狙どものあつまりを

りて猶我をもつぷ手打せんとするに、今に心

10 ざしをとげざる也となくくかたる。うばらいふ。狙

は入まねしてもよき事はせず。仇打せんと

1 ならば多くの者をかたらひてうて。しかは

心得候へども、水中の穴住、海老は甲を着

て蟹の矛取たれど、水をはなれてはおのが

輩よりよわし。魚は海中にこそ人をも

5 とりくらふがありといへど、そとにはいまだいたらず。

到らば又必くらはん。誰をたのみたれをか

かたらはんとて、ふたつのはさみ八つの足すりして

泣さま不便也。いふ所ことわり也。我はかり

事を授けん。汝がすむ流れにはいつより

10 水そこにしづみたりけん。鉄のさびくさりし

(44才)

(44ウ)

（中欠）

1 あるを両螯にさゝげて、皆めせと云。白は心ゆくまゝ、にくひつくしたれば、そこらに漿汁をたれちらしたり。鉄金鉞先門に入て猿丸が間にうかゞひ入る。長者はしらずしてうまいしたり。5 鉞まづ入て猿がはだへをさす。こは何事ぞ。いたやくとて逃いづるを、はさみねやの口に在てまめくしき右の手をはさみ切たり。あと叫んで門の方へはしり出ればふん汁にすべりてたをる、所を、いし白軒よりおちて猿が上にどうと音してはたらかせず。蟹はひかゝりて、おのれに1 親をうたれしぞ。仇うちおぼえたかとして両螯に力を入て猿が首をはさみ剪たり。此さわぎに群狙はこ、かしこと逃るを物共追つめくゝてみな殺しにしたり。猿丸は南朝5 の帝也。れいの手のうらかへす寂慮には君といへどもたのみなしとて皆敵となる。それをしたがへらば黍団子の餌を多くあたえて朝敵の名をのがる、足利が俊才也。されば西の国々には大祿の武士多し。足利が後10 又渠が儼に奪はされん。我は忠信の

《題不明 卷子本にも断片存す》

（45才）

佐藤本に云ふ捨石丸也》

（貼紙）

1 財宝も何も一人子の小伝二にまかなはせて、このむ酒のみて明暮遊びけり。姉娘の尾になりて豊苑比丘尼と名づけて後世の事おこなふなめに、母なれば家の内の事5 あづかりて小伝次とはかり合せたれば、立入る人あまた、是をぞたのもしき御仏と拝みたりけり。捨いし丸といふ男身のたけ六尺にあまりて肥ふとり力人にすぐれて、酒のみても又世にならびなしといふ。長者の遊び敵10 として召れけり。ある時酔のすゝみに、己はえへば野山にふす故に、石すてし如く1 うまく寝入たらんには熊狼に出あひて喰はれんが不便也。此つるぎは我父の山に入て遊びたまへる時に、大いなる熊出ていかりにらみ齒むきて立向ひしかば、此5 劍にたゞ一うちに打殺したまふ故に熊切丸とは名付たまひし也。おのれ酔ふして物に命とられん事不便なり。是得させんとてたまはりぬ。くま狼は手どりにせん。鬼や出なん。それもたゞ一うちに討とらん10 にはおに切丸と呼んと左におき、喜びの盃飲しらず。酌にたちしわらはめが

（45ウ）

（46才）

（46ウ）

1 今は三ますに過ぬべしと嘔ふ。野風にあらんとてよろほひたつ。長者見て、得させし宝剣失ひつらん。かへるを見とゞめんとてしりにつきて行。はた流ある所に足5をひたしてふしたり。小伝次父の御むかひと行て見れば捨石は臥たり。枕がみにつるぎ有。長者さてこそと劔とり上て行を、目さめて、ぬす人入たりと高らかに呼はり、奪ひかへすとて主をもわすれてあらそふに、力おとりたれば劔持ながらあ1をむきになりて捨いしが枕のかたにたをれたり。小伝二やうく追つきて丸を引のけ父をたすけんとすれど力よわし。九又小伝次をも捕へてはなたず。からうじてのが（れ）5父をいたはりてかへらんとす。劔大事の物也。今はくれじとて柄のかたをつよく握りしに、ぬけはなれたるもしらず。長者は老の力にたへずして鞘とりて、己は日本一の力量ぞ。武藏殿と申せしは西10塔一の法師なりとうたふ。捨いし跡をつけて、衣河へといそがる。其ひまに小1伝二につるぎ取をさめさせてかへる。あとに猶立まひて脛のあたりを切さきたり。父の面に飛ちりかゝるに、劔をやうくうばひ

## (47才)

とりて面の血ぬぐひく御供す。子に助5けられて家につきぬ。姉の尼これほとへば、石めが酔ぐるひして劔ふりたて、おのれが高もゝをあやまちしに、血はしりてつきたりといふ。あやうき事なりし。先衣ぬぎたまへ。洗ひてん。休ませたまへと云。父10は酔ふして、いなくと云。屏風かこひておとゝひはかたはらに臥ぬ。あした目さめ1て見れば口あきて肌はひえたり。驚きさわぎて、くす師誰かれ人はしらせて追ゝに來て診脉し、はや事きれたり。卒症のしるし見たまへとぞ。たゞくおと5どひ泣に涙なく、共にしなんといふばかり也。一族追ゝよりあつまりて、今はいかにせんと力をつけて、くす士等、尼に薬たうべよ。小伝二男ならずや。心よわしと、さまぐいさむ。家の子らいふ。はしたなくて病にや。又捨石めが10疵つけたるにやといひさやめくを、一郷き、つたへて、病ならず。長者は日頃すくよ

## (48才)

## (47ウ)

## (中欠)

1たまへりし。いそぎ行て御をしへをつけよ。その後には旅にたてとぞ。小伝二も此事

## (48ウ)

心もとなりしをと申。捨石はとりぐの事耳に入て、主ごろしとて御とがめかうぶるべし。

5 おそろしとていづちへやゆかん。先江戸へところろぎして送ゆきしが、力量世に

すぐれたりしかば、車つかひにやとはれ、すまひ力持に交はりて、ついに劣り

たる沙汰なし。高貴の君、城市

の富豪どもの、捨石といふ天のした

1 の大兵出て相手なしとて、こゝかしこより

めさるゝ中に、西の国の守何がし殿のいたく喜びて召かゝへらるゝ。名をいかづちと

つけて、雲井にとゞろく御名づけ也。さて

5 本国に御くだりの御供つかふまつれとありて御乗物ぞひにつとつきてまいる。さて又

小伝二は香取のかんづかさのもとに在て、弓馬鎧太刀うち組打までよく学

びえたりしかば、今は御暇申べし。石はさだ

10 めて江戸へくだりたるべし。すまひとりと成

《卷子本に存する宮木家の数葉也。

又同類の一篇なるべし》

1 司解しのみならず、ついに庶人となりくだりしかば、かん崎の津にめのとがよし有て、こゝに

（49才）

はふれ来たりたり。めも藤原なる家にて、

父につかへよ。おのがもとにあれといへど、此首ほそき

5 人にしたがつは、めの子のいたいけさにえわかれずして迷ひ来たりけり。もたせしいさゝかの財

も何も失ひてわびなきしてついに空しく成たまひけり。みはうぶりの事はもてこし

小袖調度売払ひてまめやかにとり行なひたまひけり。彼めのとはやもめ住して

1 一人にやとはれぬ針とりて口はもらへど、御かたぐの為にや及ぶ。母君はおさなきを膝に

すゑてたゞ泪のひるまもなくておはするにめのとが云。かくておはさばひめ君も我も

5 土くひ水のみて命いきん。いかにおぼしめすや。此姫きみ此里の何がしの長がむすめに養

はせたまへ。しるしに黄がね十ひらまゐらせんと申。家富み人あまた召つかへて、夫

婦の志も都の人恥かしきばかりになんある。よき罪とりして後はよくつかへさせ

1 んものぞとすかいこしらふるに、うきが中のよろこびして、やうくうけひたまひけり。遊びと

いふはいやしき世わたりともしらずして鳥飼のしろめが宇多の上皇の御まへに

5 めされて浜千鳥とうたひし事のみ聞しりて、めのとによくせよと仰たまひけり。やが

（貼紙）

（49ウ）

（50ウ）

（50才）



て長がもとへ走ゆきて、御ためよしと申  
たればかのしるしおくりけり。母君是  
兄たまへ。人の失ふ宝を多くつみもて  
有人也とてすゝろぎていふ。母が手は  
1 なれて一日ひと夜も外にあらぬものから  
泣わぶらんとて悲しがりてのたまふ。姫ぎみ  
きゝて、御ゆるし有所ならばいづかたへもゆ  
かん。女はおとなになれば必人にむかへ  
5 らるゝとやとおとなしくのたまふに、今は  
名残とて背なで髪かき上て、さめぐ  
ないたまふ。めのと云。いかにしたまふ  
らん。しるし納めたまへばとていさめたり。  
かなたの子と思すには涙とめて出たゝし  
たまへりけり。何の心もあらぬものから  
1 にぎはしき家に入て、よき所也とてよろ  
こぶ。長夫婦はいとし子ぞとて、物き  
よくして着せしかば、をさなき心には  
たゞうれしとて、その夜より馴むつれて  
5 うれしゝとのたまふ。母ぎみはあす必こ  
よとのたまひしかど、たゞ便のみよき所也。  
うれしゝといひこされたり。めのとがいふ。此  
しるしの中を二ひらたまへ。御父の爲に  
おぎのりわざして今にかへさぬとてせめ  
10 きこゆとて分ちとるゝいふ。我父は此

(51才)

1 郷のくす士なりしが、物よく知たる人なりし。  
すべての秋物するは、周の制に仕が中を  
二つは得る事なりしとぞ。いにしへのかしこ  
き代のさだめ也とて、ことわり事いひて  
5 とり納めたり。母ぎみはたゞ顔見せよゝ  
とたより毎にいひやりたまへども、めのとが  
中虚にして止ぬ。ひめぎみも母の  
御ゆるしにてこゝにあれば、長夫婦こそ今  
の親なれとて、なほざりにのみ過したま  
10 へりき。宮木といふ名は物しりの付

(52ウ)

(中 欠)

(51ウ)

1 みたりしに、さては御母の事を聞しらせしもの、  
ありしかとて、尸は波にうかびあがりしを  
ひつ木に納めて、此野づかさなる所に  
はふりをさめしと也。宮木がかばねは  
5 波にゆられゝて神ぎきの櫛もとによせ  
たりしかば、ゆり上の櫛とも円光大師の  
伝記にはしるされたりし也。翁むかし  
河のみなみの神嶋に物学ぶとて  
草の庵をむすびて、三とせ在しほかに  
一とせの夏、草木みな枯て河水も涸  
1 つくるよと見るに、この櫛の古杙のかしら

(53才)

出たりしを、人やとひて一さかあまり切せて、古き事しのふ人ゝに一片づゝあたへたりし也。或は足利やうの文庫の形つくら5せ、翁がこのむ茶箱にもつくらす。今は人に乞れてとゞめずなりぬ。歌もよみし也。

うつせみの 世わたる業は はかなくも  
高きいやしき 立はしり おのがどちく  
はからひて 有とふものを ちゝの実の  
父や捨けん はゝそ葉の 母の手

(53ウ)

1 さかり 世のわざは 多かるものを 心にも あらぬを  
いかに たをやめの 操くだけて しなが鳥猪  
名のみなとに よる船の かちまくらして  
波のむた かよりかくより 打なびきぬ  
るをうれたみ 悲しくも かくてしあらば 生る

5 身の いけりともなしと 朝よひに うらびな  
げきて 年月を 息つきくらし 玉  
きはる いのちもつらく おもほえで

此かん崎の 河くまの 夕しほ待で  
よる波を 枕となせれ 黒かみは

1 たま藻と むなしくも 過にし妹が おき（つき）  
ををさめてこゝに かたりつき いひ次

(54オ)

けらく この野べの あさちにまじり  
露ふかき するしの石は たが  
5 たむけぞも

又よめる文庫の歌

水そこに年をふる江の橋ばしら

あらはれて又世ゝにながれん

こは正親町の三条の侍従ぎみのうい  
10冠のいはひ物によみて奉り「し」也

(54ウ)

《楠公雨夜がたり別稿二葉と妖尼公一葉》

1 翁聞つたへた昔、楠公の湊川の討死前に

夜の雨のさびしさに、近臣をめされて、面白い  
はなしがある。昔くゝ猿が尻はまつかいなばかり  
でもないぞ。猿が鳴と云はとつと西の国ぞ。

5 へな 所じゃげな。柿の木の大木が

あるを旦那の猿丸が、木の上のとつとさきぞ。

より取にくふと、庭に穴住している蟹、

申く旦那さま、それ一つたまわれといふたら

是やるはといふて、くさったのを蟹の目を

あてに投げつけたら、ひしつりといふて、目ばかりでは

(55オ)

1 ない、命もしまふてのけた。親の腹から子が

はひ出て、いつのまにやら成人して親のかたき

うちに出る。道にて蟹殿くゝ、どこへいかしやる。

おこしの物は何じや。日本一の黍団子じや。一つ

5 くだされ、お供申そか。段々大勢になつて

かたきの内へしのびこんで雪隠やら寝所

やら庭やらにかんていて、遊る所をはさみ

やら小刀やらして首はとうと切たげな。足利の

反逆も是に同じ事ぞ。ついに天子を島へ

10 流して弑したつたといの。めづらしいではないか。

汝らもようきけ。ない命はすつぱりと死

1 で名を上よといわれた。子の正行どのも父

が討じにと聞て、お腹めさりよとあるを、母御が見

つけて、汝ようきけ、たのみなき世には有とも

君の為此子といやれ。我生のびん。又正行

5 どの、内政が、よめつた夜から帯といた事なし。

おきに入らりませぬかと問たら、君のために生て

ゐる命、何の契約してくるしみを見せんとありし

とぞ。此内室もついに尼になつて後生を大事と

とむらわれた。天地の興廃かくの通りじやは

10 此物がたりのつい手は

やくたいじやほどに

1 むかし／＼じや。鎌くら殿の御時に三代の世に

尼將軍と申て、世に珍しき御方、垂簾の

政事をとらせたまひて、天の下よく治まり、父の

時政は相模の北条へ隠居して、義時

5 の執政   つゞけ、又御子の実朝

公と相枕の御教訓、近臣の若との原も皆

（56才）

めされての御酒機嫌、老臣の中にも畠

山の重忠、色黒く背高く目鼻あざやか

1 にて、男一疋と云べし。是は中々承引すまじき人

なれば、或夜雪のふかき夜、一大事、こよひは宿せ

よとて仰下る。こゝにては猶人にやもれんとて

御庭の亭に足かるげに、足駄の音はやく

5 あゆませ給へり。局ども御跡につきて参れり。

重忠大事也とてみそかに御跡よりあゆめり。

亭の内はうづまぬ火の気炎たり。燭の

光かゞやきてまばゆし。たゞさしむかひて僕ごと

御仰をまつ。御かはらけとらせて先たまひて、

10 雪ふかし。一つと仰下るにぞ、かたじけなくてかしこみ（57ウ）

（後 欠）

（56ウ）

翻刻注記

（1才貼紙）とあるのは、1才に直接貼付されていることを示す。

13才裏面、43才についても同様。なお、以下特に断わらない限り、これら整理に際して付された貼紙の文字はすべて朱書によるものである。

2才6行目の「さが」の「が」には「賀」をあてている。（作者は清

音「か」にこの文字をあてることはない）

2才10行目の「しかのね」は貼紙による修正。もとは「鴈がね」と

あつたらしい。この部分を含む「しかのねきむく鳴」までをさらにミセケチにより「なくなる」と訂正したわけである。

2ウ10行目の下端に「二」（丁数を示す数字らしい）とある。

3ウ6行目「むすばねば」の「ね」は貼紙による修正。もとは「ん」とあつたらしい。

3ウ10行目「すがしくて」の「が」には「賀」をあてる。

3ウ10行目の下端に「三」とある。

4オ2行目「みかど」の「ど」には「杼（ト乙類の万葉仮名として用いられる）」をあてる。

4ウ10行目「百取」の「百」は貼紙による修正。もとの文字は不明。

4ウ10行目の下端に「四」とある。

5ウ2行目「さが」の「が」には「賀」をあてる。

5ウ7行目「大とのごもらせ」の「ご」には「五」をあてる。

5ウ9行目の下端に「五」とある。

6ウ10行目の下端にも「五」とある。

7ウ8行目「うちならで」の「ぢ」には「治」をあてる。

7ウ10行目の下端に「六」とある。

8オ8行目の□は貼紙のみで文字なし。下の文字は「東」とあるように見えるがはっきりとはわからない。

8ウ10行目の下端に「六」とある。

9オの4行目から7行目にかけて手ずれがひどい。

9ウの半丁分は何も書かれていない白紙。55オのように半丁分のみで55ウにあたる部分がない、というのとは異なる。

10ウ10行目の下端に「八」とある。

11オ1行目の「いかで」の「で」には「泥」をあてる。

11ウ11行目の下端に「九」とある。

12ウ10行目の下端に「什一」とある。

13ウ10行目の下端に「十」とある。

13ウ裏面は序文章稿。この丁は袋綴にせず、裏面が見えるように製本されている。また、貼紙は13オ裏面に直接貼付されている。

15ウ10行目の下端に「三」とある。

16ウ7行目「同じく」の「同」は貼紙による修正。もとの文字は不明。

17オ9行目「適」は貼紙による修正。もとの文字は不明。

18オ3行目「時の人」は貼紙による修正。もとは「政、人々」とあつたものか。

19オ2行目「御さが」の「が」には「賀」をあてる。

19ウ11行目「申さく」の□は墨がにじんでいて判読しがたいため。

20オ5行目「さが」の「が」には「賀」をあてる。

21ウ7行目「船やぐら」の「ぐ」には「具」をあてる。

22オ1行目の□。酒の部分は虫損。

22ウ8行目から10行目までの三行分は貼紙による修正。もとも漢文が書かれているが全文を判読することは不可能。

22ウ10行目の下端に「三」とある。

23ウ10行目の下端にも「三」とある。

24オ1行目の□は何かの文字を消した跡らしい。貼紙による修正がはかれたのかもしれない。

24オ4行目から5行目にかけて文字の上に右上りの斜線がある。

(25才自筆貼紙) これは25才に直接貼付された三行のみの自筆断片。三行目は紙が切れているため不明のところが多い。

25才1行目□及び2行目■のところで紙が破れている。

26ウ5行目「忠信」の「信」は貼紙による修正。もとは「心」とあったか。

28才1行目「呂氏の奸則天の」は貼紙による修正。もと「呂氏則天にもわつ」とあったらしい。

28才28ウは一枚の用紙。すなわち「妖尼公」と「目ひとつの神」は連続して書かれていることになる。

32才8行目「さゝぐ」の「ぐ」には「具」をあてる。

36ウの次にある貼紙のうち「コノ一片ハ……」の一行のみ墨書。

37才4行目から7行目にかけて文字の上に左上りの太い斜線がある。

37才9、10行目「森陰のいほりに／かへ」は貼紙による修正。もとは「森陰の庵にかへる」とあったようである。

43才には三種の貼紙がある。すなわち、まず《》で示した整理の際の貼紙一葉が貼られ、その下に作者自筆の貼紙一葉が付されている。そして、43才にじかに書かれた本文の題名「楠公兩夜かたり」も貼紙によって修正されたものであり、もとは「猿嶋の敵討」と書かれていたらしい。

43ウ11行目の下端に「六」とある。

50ウ10行目の下端にも「六」とある。

51ウ10行目の下端に「九」(あるいは八を消した横に九を書いたものか)とある。

52ウ10行目の下端に「八」とある。

53才ウ及び54才ウの二丁は、それ以前とくらべて上部の空白部分はやや多いようである。

53ウ10行目の下端に「四」とある。

54才3行目から9行目にかけて文字のうえに左上りの太い斜線がある。

54ウ2行目から4行目にかけてと3行目から7行目にかけて、文字のうえに右上りの斜線二本がある。

54ウ4行目「たが」の「が」には「賀」をあてる。

55才157ウまでは、文字・用紙ともに54ウまでと明らかに異なっている。文字はやや小さくて太く、用紙はタテ24・4センチ(54ウまでの用紙は表紙と同じくタテ27センチ)のものが用いられている。

55才5行目のはじめ数字分判読不能。

55才は半丁分のみ。10行目の下端に「三」とある。

56才は11行目のところで表と裏にわかれるべきであるが、用紙がかわったためか、裏打して製本した際、56ウの最初の一行分が表の方に入ってきて、みかけ上は、56ウ2行目「が討じにと……」から56ウがはじまっている。

56ウ8行目の下端に「四」の文字に重ねて「五」と書かれている。

57才5行目「執政」のつぎの数字分判読不能。

57ウ10行目の左下端に「三十」とある。

天理問子本 春雨物語（翻刻） （木越 治）

〈付記〉

本書の草稿本としての位置づけについてはすでに、拙稿『春雨物語』の成立——稿本群の検討を通して——（『近世文芸』第24号、昭和50年10月）や『春雨物語』（『研究資料日本古典文学第四卷近世小説』所収、明治書院、昭和58年10月刊）などでとりあげているが、なお未解決の問題がいくつか残されている。これらについては稿を改め、次号において他の稿本との関係等を含めて再度とりあげる予定なので、今回は翻刻のみにとどめ、内容の検討には立ち入らないことにした。

なお、最後になりましたが、今回の翻刻を快く許可されました天理図書館に深くお礼申し上げます。